

書は、総合病院に勤務する一精神科臨床医であった著者が、みずからの眼を通して心身症や心身医学について考えることを意図して執筆された。

氏が総合病院に勤務していた当時は、リエゾン精神医学という用語が日本に紹介されて間もない時期であり、大病院であってもせいぜい数人か時には一人の精神科医が、身体科からの依頼を受けて病棟に出向くスタイルが主流であった。リエゾンチームもまだ存在せず、小此木が表現しているように「本業をはなれて何かよそ様の仕事の手伝いに出かける」(p197) ような、心もとなさの中での仕事であったろう。

私が氏の偉大さを感じるのは、そうした現場に身を置きながら、ちょうど異文化の中の文化人類学者のように、身体を客体化することで威力を発揮する身体医学の世界を鋭く観察しつつ、精神科医として抱いた「総合病院という一つの世界の中で自分が異邦人であるという意識」も細やかに感じ取り、率直にその観察に含めているそのありようである。

私の中で氏はいつも、決して居丈高になることはなく、ときには柳のように長い体軀をしなだれて、申し訳なさそうに見えることすらある方であった。けれども「柳に雪折れなし」という言葉通り、雪の重みを身に感じながらも決して折れることなく、見るべきものを見、言うべきことを言う人であった。

そういう氏の静かな決意を、私は本書の次のような言葉から感じる。

「私は……一人の病者にむかって、ほかならぬあなたは一体どんな人なのかと問う。その人の人格に、その人の担ってきた歴史に問いかける」(p6)

「精神科医には身体各科の医師とはまた違った身体への眼があるはずだと思うようになった。身体を精神とは別のものとして客体化するのではなく、身体医学が切り捨ててきた歴史や関係や意味といったいくつかの要因をいま一度身体の中に再統合し、人間の全体性を回復しなくてはなるまいと思うようになった。このことは臨床の場においてどのように可能であろうか。私なりに模索したその中間報告が本書である」(p255)

新訂増補版となる本書には、木村宏之氏との対談が新たに収載され、再版にあたっての短いあとがき

新訂増補 心身症と心身医学

一精神科医の眼

成田善弘著

金剛出版、四六判 264 頁、3,300 円、2025 年 2 月刊

(東洞院心理療法オフィス・太子道診療所) 北村婦美

本書は、本誌の読者であればまず知らぬ人はいない精神療法家・成田善弘氏の、生前に出版されたおそらく最後の著作である。1986 年に岩波書店から刊行された初版を、約 40 年の歳月を経て金剛出版が復刊した。

著者自身が「はじめに」で述べているように、本

も付されている。対談からは、心理療法の学びについてや、拝聴と共感について、自己開示についてなど、最晩年の著者がどのような考えをもつに至っていたのかを、本人の語り言葉に触れながら知ることができる。

氏を直接知る人にとってもそうでない人にとっても、病む人間ということを見つめ考える本書は、不思議と古びない意義と魅力をたたえている。ぜひ一読をお薦めしたい。
